

Report

第15回 ユネスコスクール 全国大会 **報告書**

未来のユネスコスクールを考える

— ASPnet 70周年を迎えて —

開催日 / 2024.01.20

会場 / 国立オリンピック記念青少年総合センター

【主催】 文部科学省、日本ユネスコ国内委員会
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)

【共催】 国連教育科学文化機関 (UNESCO)

【協力】 NPO 法人日本持続発展教育推進フォーラム、公益社団法人日本ユネスコ協会連盟



目次

大会概要	03
当日プログラム	04
各プログラムの報告	05
1. オープニング	05
2. 国内ユネスコスクールの現況について	06
3. パネルディスカッション	07
4. ユネスコ未来共創プラットフォームの紹介	10
5. ポスターセッション	11
6. 分科会	13
第1分科会	14
第2分科会	15
第3分科会	16
第4分科会	17
第5分科会	18
第6分科会	19
7. クロージング	20
データ	21
フォトギャラリー	26

※本文中のリンクは2024年3月時点の情報です。予告なくアクセスできなくなる場合があります。

大会概要

1. 大会テーマ 未来のユネスコスクールを考える –ASPnet 70周年を迎えて–

2. 目的 ユネスコスクールの意義・役割や国内外のユネスコスクールをめぐる動向を周知するとともに、優良事例の共有や関係者間の交流を通じて、各校の活動の質の向上とネットワーク強化を図る。特に今回はユネスコスクール発足70周年の節目として、これまでのユネスコスクールの歴史や成果・課題を振り返り、今後を展望する機会とする。

また、本大会を「ユネスコウィーク2024」（2024年1月15日～1月21日）の一環として開催することで、より幅広い層にユネスコスクールの取組に対する関心・理解を促すと同時に、ユネスコ活動のメインアクターとして期待されるユネスコスクールが、他のユネスコ活動関係者やユースとの連携・協働の可能性を見出し、ユネスコ未来共創プラットフォームの活性化に寄与することを目指す。

3. 日程・場所 日時 / 2024年1月20日(土) 9:30～17:00
 場所 / 対面会場：国立オリンピック記念青少年総合センター
 (〒151-0052 東京都渋谷区代々木神園町3-1)
 オンライン：Zoom
 ※一部対面のみまたはオンラインのみのセッションあり

4. 対象者 ユネスコスクール関係者(教職員、児童生徒)、一般幼小中等学校等教員、教育行政関係者(教育委員会等)、教育研究等関係者(大学、研究所等)、教員志望者(教職課程の学生等)、ユネスコ活動関係者など

その他、SDGs達成に向けた人材育成や ESDに関心のあるステークホルダー(企業、報道関係者、NPO・NGO 等)

5. 実施体制 【主催】 文部科学省、日本ユネスコ国内委員会、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU)
 【共催】 国連教育科学文化機関(UNESCO)
 【協力】 NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム、公益社団法人日本ユネスコ協会連盟

チラシ



当日プログラム

時 間		内 容
9:00-09:30	(30分)	受付/入室
9:30-11:45	(135分)	全体会 <ul style="list-style-type: none"> - オープニング映像 - 開会あいさつ / 文部科学省 - ビデオメッセージ：「ASPnet70年の歩みと今後の展望について」 / ユネスコ本部 - 国内ユネスコスクールの現況について / ACCU内ユネスコスクール事務局 - パネルディスカッション：「未来のユネスコスクールを考えるーネットワークの活用で広がる学び」 <ul style="list-style-type: none"> ・ モデレーター / 林川真紀（ユネスコ・ジャカルタ事務所 所長） ・ 柴川弘子（岡山大学 助教 / ASPUnivNet） ・ ユネスコスクール加盟校教員 3 名
11:45-11:55	(10分)	ユネスコ未来共創プラットフォームの紹介、分科会の趣旨説明
12:00-12:45	(45分)	ポスターセッション <ul style="list-style-type: none"> - 希望するユネスコスクール、キャンディデート校、ユネスコ活動関係者等
12:45-14:00	(75分)	休憩・移動
14:00-16:00	(120分)	分科会 <ol style="list-style-type: none"> ① ユネスコスクール交流会 - ユネスコスクールとしての活動を発展させていくために 対 面 ② 「ESD for 2030」をみずえた新たな評価へ - ACCU 評価事業をもとに 対 面 ③ 生徒たちと考えるー地域や企業とつながる“越境した” ESD 活動 ハイブリッド ④ ユネスコスクールを動かす教職員とは？ー活気のある学校づくりの秘訣 ハイブリッド ⑤ GIGA×ESD：デジタル時代のユネスコスクールを考える ハイブリッド ⑥ Bringing living heritage to the classrooms in Japan オンライン <p style="font-size: small; margin-top: 5px;">※ 本分科会への対面参加者用に会場に部屋を設置、対面参加者は各自PC持参 ※ 日英同時通訳</p>
16:00-16:15	(15分)	休憩・移動
16:15-17:00	(45分)	全体会 <ul style="list-style-type: none"> - 分科会報告 / ⑥以外の各分科会担当者 <総括> 林川真紀（ユネスコ・ジャカルタ事務所 所長） - クロージング映像 - 閉会あいさつ / 大安喜一（ACCU 教育協力部 部長）

※ 会場は 18 時まで開放し、参加者同士で交流を深める時間とした。

※ 大会終了後、同会場にて第 14 回 ESD 大賞授賞式が開催された。

各プログラムの報告

1. オープニング

オープニング映像

法政大学・坂本旬教授のゼミに所属する大学生に作成いただいたオープニング映像を上映した。当日のプログラムやユネスコスクールの活動イメージを伝える、大会の幕開けにふさわしい明るい映像で、会場の期待感が高まった。



開会挨拶（文部科学大臣 盛山 正仁）

日頃より持続可能な開発のための教育(ESD)の推進に御尽力いただいていることに感謝申し上げます。ユネスコの理念や目的を実践するユネスコスクールのプロジェクトが開始されて70年となった。現在ではユネスコで最も大きなネットワークに成長し、世界182か国、12,000校以上の加盟校において様々な教育活動が行われている。我が国においては、学習指導要領及び第4期教育振興基本計画においても、「持続可能な社会の創り手」の育成を掲げ、ESDを推進することが明記されている。戦争や紛争に伴う人道危機、気候変動など様々な課題に直面する現在の社会において、教育を通じてグローバルな課題解決に



貢献する ESDの重要性は増しており、ESDの推進拠点であるユネスコスクールへの期待も高まっている。先月、世界約80カ国の参加を得て東京で開催し、日本のユネスコスクールも参加・発表した「ESD-Netグローバル会合」においても、日本の ESD実践に対して高い関心が示された。本大会開催に御尽力いただいた皆様に感謝申し上げるとともに、本大会が今後のユネスコスクールの活動と ESDの更なる推進に向けて実り多きものとなることを祈念している。



ビデオメッセージ（ユネスコ本部 ASPnet 国際コーディネーター 齋藤 珠里 氏）

本大会の開催についてお祝い申し上げます。ユネスコスクール(ASPnet) は昨年11月に70周年を迎えた。ユネスコ総会に合わせてASPnetに関するイベントや展示を行ったほか、各地でも記念行事が実施された。9月に英国のナショナルコーディネーターが中心となって企画した訪日プログラムでは、9か国からユネスコスクールの教員や生徒が参加し、京都にて文化を通じた平和について議論・交流する取組が行われた。現在進行中の国際的なキャンペーンやコンペティションもいくつかあるので、日本からもぜひ積極的に参加してほしい。ユースからの国際的な発信、そして日本の強みであるASPUnivNetの支援体制を活かした取組の発展を期待している。今後の予定としては、加盟申請や加盟校間の情報共有・協働の機能を含む ASPnetの新しいデジタルプラットフォームの構築が進んでいるのでお待ちいただきたい。最後に、ユネスコ教育局長は平和構築のためにはSDG4(教育) が欠かせないとメッセージを発信している。そのためのリーダーシップを育むユネスコスクールが果たす役割について、これからも皆様と模索していきたい。



2. 国内ユネスコスクールの現況について

ユネスコスクール事務局より、ユネスコスクールの概要と年次活動調査結果等からみる国内ユネスコスクールの現況について説明した。

ユネスコスクールの趣旨や目的、ユネスコが示す重点活動分野、現在の加盟校数、国内の教育施策との関連などの説明*1に続き、近年活動の質の向上とネットワーク強化を目的として導入された「ユネスコスクール定期レビュー」の概要を紹介した。また、2022年度ユネスコスクール年次活動調査結果*2をふまえた国内ユネスコスクールの成果と課題として以下の点を挙げた。

成果

1. 地域との連携

学校以外の団体との連携について7割以上が「ある」と回答し、連携先として「地域の協力者」が最も多い。

2. 学校間交流の増加

国内・国外ともに「交流した」との回答が前年度を上回り、ネットワーク活用への意識が向上してきている。

3. 評価への認識の高まり

ユネスコスクールにおける教育活動を評価するための工夫を「している」との回答が前年度を上回り、ESDやユネスコスクールとしての活動への評価の取組が進んできている。



1. 活動テーマ

重点活動分野のうち、ESD以外の分野の活動実績が少ない。ユネスコスクールの趣旨に沿った他の活動テーマへの取組の展開も視野に入れるとより良い。

2. ネットワークとしての意識

ネットワークの特性を活かした学習を取り入れる、ユネスコスクール間の交流を通じて指導力の向上を図るなど、教員自身が積極的にネットワークを活用することで、より豊かな学びにつながる可能性がある。

3. 支援への接続

ユネスコスクール事務局や ASPUnivNetからの支援が十分に届いていないため、活用促進に取り組む必要がある。

*1 … 詳細はユネスコスクール公式ウェブサイト参照。「ユネスコスクールについて」「加盟校情報」

*2 … 詳細はユネスコスクール公式ウェブサイト参照。「ユネスコスクール年次活動調査」

3. パネルディスカッション

ユネスコ・ジャカルタ事務所長 林川眞紀氏をモデレーター、ユネスコスクール加盟校教員及び ASPUnivNet担当教員をパネリストに迎え、「未来のユネスコスクールを考えるーネットワークの活用で広がる学び」をテーマに、実践紹介をふまえて議論を展開した。



実践 / 活動紹介



新潟大学附属長岡小学校 教諭
高野 真之介 氏

中国及びホノルル(米国)の学校との交流に関する授業実践について紹介する。中国の交流相手校は、当校を含む新潟大学附属6校園が交流提携を結んでいる中国の学校の一つである。5年生児童がタブレット端末を用いて Zoomで交流した。自己紹介に加えて教科書教材の内容に沿う形で長岡市の魅力紹介などを盛り込み、ブレイクアウトルーム機能を利用してグループでの交流も行った。ホノルルとの交流は、長岡市との姉妹都市提携による交流事業を活用したもので、長岡市国際交流協会の支援のもと、同様に Zoomでのオンライン交流を行った。いずれも子どもたちの生き生きとした姿が見られ、また児童の振り返りからは相手国の文化や価値観への敬意、長岡の魅力の再発見、異文化への関心の高まり、英語学習への意欲向上などが見えてきた。

これらの海外との交流は外国語や音楽の授業として実施したが、限られた回数での交流に留まり児童には特別なものとして認識されている。今後はより頻繁に機会を設け、日頃から交流相手を想起し、具体的かつ深い交流につながるようにしたい。



大仙市立大曲南中学校 校長
島田 智氏

本校のESDの取組を「ストーリー」と「ネットワーク」の視点から紹介する。ESDの目的を「E:教育」と「SD:持続可能な開発」に分けて考え、それぞれの目標を設定している。目標達成に対する評価は生徒の振り返りの文章や普段の行動観察から行っている。目標達成のための手段として、ホールスクールでカリキュラム・マネジメントに取り組むことが重要と考えており、ESDカレンダーやESDストーリーマップを作成している。各教科等で目標として設定している身に付けたい力の位置づけを明示する、総合的な学習の時間の探究的な学習の流れを軸として、教材のつながりや外部とのつながりを表示する、などの工夫をしている。

ESDの実践に大切なのは、学びのストーリーを作ることであり、生徒の主体性を担保するための柔軟性を残しつつ、単発ではなく3年間のつながりをふまえたストーリー展開が重要となる。「過去→現在→未来」のストーリーと「ローカル(地域・企業)」なネットワークで展開した「未来のエコハウスを設計しよう」という事例(1年生、家庭/総合)や、「講演→ワークショップ→交流」のストーリーと「グローバル(キリバス、コーディネート団体)」なネットワークで展開した「ワールド・気候スタディーズ ESD/SDGs」(3年生、総合)の事例などがある。アンケートや振り返りの記述などから生徒自身が成長を感じていることは確実な成果であり、今後もESDの取組を通じて持続可能な社会の担い手を育てていきたい。



東京都立山崎高等学校 教諭
阪田 紫帆里氏

本校は加盟して約1年とまだ歴史が浅いが、ユネスコスクールであることを校内外で発信し、全校を挙げてESD推進に取り組んでいる。本日はグローバル・ネットワークを活用した総合的な探究の時間の実践について紹介する。

本校の「探究」は3年間のロードマップを作成し、校内の体制整備に加え ASPUnivNetの教員や地域の方などを含むコンソーシアムも形成して、ホールスクールで取り組んでいる。1年次は「グローバルな視点」を重視しており、ユネスコスクール・ネットワークを活用して英国、韓国、ロシアの加盟校との学校間交流を行った。ロシアとの交流は国際的な政治情勢もあり不安や迷いがあったが、国際政治を超えた教育の場で交流することの意義を感じ、また相手校の担当教員とも協議して「できる」と確信した。互いの学校生活や学習活動について質問し合い、他では得られない50通を超える生の情報に触れる貴重な経験となった。創立40周年のお祝いメッセージをいただくなど、温かい交流も生まれた。

ユネスコスクール・ネットワークを通じて生徒主体で国際理解に貢献する取組ができたこと、平和を希求するユネスコの理念を改めて生徒に示すことができたのは大きな成果である。またホールスクールで取り組み結果を得られたことで、教員の成長にもつながった。今後は国内ユネスコスクールとの交流や更なる地域連携にも力を入れていきたい。



岡山大学 助教
柴川 弘子氏

ネットワークづくり・学校間交流の仕組みと仕掛けについて、ASPUnivNetの立場から紹介する。自身が顧問を務める「岡山県ユネスコスクール高校ネットワーク」は立ち上げから約10年経つが、毎年交流会を開催し、それに向けた事前学習会などを組みこむことで継続的に活動できるよう工夫している。また、各校が持ち回りで幹事校を担当することで、主体性が維持されている。県の校長会公認の団体であるため校務として活動ができること、卒業生がボランティアとして関わってくれることなども特長である。10校の参加校は私立・公立、立地も様々で活動内容は多岐にわたるが、互いに学び合い共創しようという理念が共有されている。ブルガリアのユネスコスクールとの交流や、自身の共同研究のつながりでマレーシアの大学教員にネットワークの活動を紹介し、現地の高校との交流に発展した例など、国際交流の支援をしている。

学校間交流では、広島とインドネシアの小学校のオンライン交流を支援している。コー

ディネーターとして交流内容や事前準備の助言、当日の通訳などを行った。6年生の交流から全学年で交流したいという話になり、6年間の学びをつなぐ形に発展して嬉しく思う。

子どもたちの英語学習と支援(介入)のバランス、自身の研究や業務とのバランスなど、課題を感じる面もある。また、学校側が支援を求めることを躊躇される場合があるが、こちらの学びの機会でもあるのでぜひ活用してほしい。大学生や地域の方を巻き込み、より持続的な活動となるよう貢献していきたい。

ディスカッション

林川 ネットワークを活かした活動を行うにあたり、そもそもどのようにネットワークにアクセスしたか。課題や挑戦もふまえて教えてほしい。

阪田 最初はどのように海外の学校とつながったらよいかわからなかった。ユネスコスクール事務局(以下、事務局)からの交流募集メールやユネスコスクール公式ウェブサイトの申請フォームから希望を出した。

島田 教育は学校の中で完結することは不可能だと考えている。ただ、学校にとって企業や団体と連携するというのはハードルが高いものである。本校の場合は、環境教育の取組で縁のあった地元の環境関連団体とのつながりを軸にネットワークを広げていった。

林川 地域での実践をグローバルな視野で展開させていくことに課題を持つ学校もあると思う。ユネスコスクールとしてどのように工夫しているか。

島田 地域の課題をESDで解決するということは大切だが、それだけ、例えば節電・節水・ゴミ拾いだけで終わってしまっては不十分である。グローバルな視点を持ち、世界の課題を解決する必要があるということ、まず教員自身が理解することが重要である。そのような教員の姿が子どもたちにも響くと思う。

林川 学校間交流の成功の秘訣は何か。交流における課題にどのように向き合ったか。

高野 本校は海外提携校がある、市の事業に参加している、という強みがあるため、環境に恵まれているからできることだと思われる方もいると思う。一方で、自分でも違うつながりを持ちたいと考え、ユネスコスクール公式ウェブサイトから事務局に支援を依頼して、新たな交流校が見つかった。海外の学校にいくつか直接メールしてみたこともあるが、まったくつながらず困っていたのでありがたい。

林川 海外では、まだ教員が直接メールでやり取りする習慣がない国もある。事務局などネットワークの拠点となるようなところを活用するのはよい方法だと思う。

林川 大学がネットワーク組織としてユネスコスクールを支援するという仕組みは世界でも非常に珍しい。ASPUivNetとして、グローバルな活動やネットワークの活用・交流に課題を持つ学校に対してどのように支援や助言をしているか。

柴川 本学として意識したのは、まず地域のユネスコスクール同士のつながりを作ること。加盟したからこそ生じる共通の課題などもあるので、学び合いの中で解決していく関係性の構築に努めた。また自身も事務局などの外部リソースからの情報を活用して、地域の学校へ還元している。

林川 ユネスコスクール・ネットワークを活かした活動を通じてご自身、または児童生徒、教員、保護者などは何を得たか。ユネスコスクールとしての学びの醍醐味は何か。

高野 子どもたちは国際交流を通じて、自分たちの地域の魅力や課題を振り返る機会になった。

島田 自分たちが世界の一員であるという意識、世界の課題のために行動しようとする意欲、自分たちが解決のために何かできるという自信が芽生えた。「学びから行動へ」を体現できるのがユネスコスクールの醍醐味だと思う。

阪田 「ESDの推進拠点」という位置づけがあることによりホールスクールで取り組めること、ネットワークを活用したからこそ生徒に与えられた教育活動があるので、加盟してよかったと思う。

柴川 教員にとっても生徒にとっても、志を同じくする仲間が存在、心のよりどころとなり得るネットワークの力がもっとも大きな価値だと思う。

ディスカッションの後、本大会に寄せてバングラデシュのユネスコスクール2校から届いたビデオを紹介した。日本の学校と交流したいとのメッセージもあり、今後の展開の可能性を感じさせる内容であった。

最後に、林川氏からの

- 学校間で実践を共有し、そこからまた新しいことを作り上げていくというのがユネスコスクールに期待されていることであり、ユネスコスクール以外の学校も巻き込み、モデル校として積極的に発信して欲しい。
- 多文化社会に生きる我々にとって、ユネスコが目指す平和への道は相互理解、思いやり、寛容性などが非常に大切となる。ユネスコスクールは平和な世界を実現するための重要なユネスコ事業の一つである。
- それらの役割を果たす上でユネスコに期待することがあれば、ぜひ提案・活用してほしい。



ユネスコ・ジャカルタ事務所 所長

林川 眞紀 氏

とのまとめの言葉とともに、本セッションは締めくくられた。

4. ユネスコ未来共創プラットフォームの紹介

ユネスコスクール事務局より、文部科学省事業として展開されているユネスコ未来共創プラットフォームについて紹介した。ユネスコ未来共創プラットフォームとは、2019年10月にまとめられた日本ユネスコ国内委員会による建議「ユネスコ活動の活性化について」を受けて開始した、世代や地域を越えて多様なステークホルダーが連携し、ユネスコ活動の未来を共創することを目指すプラットフォームである。SDGs実現に向けたネットワークの構築・強化、ユース世代へのユネスコ活動の理解促進、民間企業等の知見や資源を活かしたユネスコ活動の支援、国内外への情報発信*、などを目的として、2022年度より ACCUが事務局運営を受託している。

ユネスコスクールは、ユネスコの各種登録事業等と並び、ユネスコ活動の活性化におけるメインアクターの一つである。国内において、ユネスコスクールはユネスコ活動関係団体の中でも大きな数を占めており、他の関係団体やSDGs達成を目指す様々なステークホルダーとの連携を図りつつ教育活動を展開していくことを通じて、プラットフォームへの貢献が期待されている。本大会は、ユネスコ未来共創プラットフォームの趣旨に照らし、「ユネスコウィーク2024」の一環と位置付けて開催することで、ユネスコスクール関係者和其他のユネスコ活動関係団体や様々な機関・団体、ユース等との連携促進の機会となることを狙いの一つとしている。

* … 主たる発信媒体としてユネスコ未来共創プラットフォームポータルサイトを運営



5. ポスターセッション

希望するユネスコスクール等がそれぞれの取組内容および成果を発表した。対面および動画発表は10校、動画発表のみは2校、対面発表のみは1校となった。各校の詳細は以下の通り。



	学校名	発表タイトル	発表の概要
1	学校法人上田学園 上田西高等学校	Dプロジェクト部の活動	本校の生徒が6割以上使用している西上田駅南口の広場について、設計の段階から参画し、その広場の整備を20年に渡り行い、毎年お祭りも開催している。
2	学校法人大阪医科大学 薬科大学 高槻中学校・高槻高等学校	Peace Now Peace for the Future	本発表では、本校の六年間完全中高一貫型教育という特色を活かしたインターディシプリナリーなアプローチでの平和学習について報告する。国内外での平和学習をはじめ、ジェンダー平等、難民支援、公衆衛生、リーダーシップ、そして医療に関するプログラム等、多様な経験を積むことが、複眼的観点から平和について考え、世界の人々と共に創造する平和な未来に関して生徒が主体的・対話的で深い学びに向かう力・人間性を涵養している。
3	宮城県気仙沼高等学校 ※動画発表のみ	小学生・中学生・高校生の枠を超えた交流を！ ※生徒による発表	現在、全国に約30万人の不登校の子どもたちがいる。不登校の原因は様々であるが、学校での学ぶ楽しみから将来への期待感を高め、不安を軽くすれば、不登校の子どもたちを減らすことができると考えた。今回、近隣の中学3年生へのアンケート調査により高校進学への不安を明らかにし、また、オンラインフリースクールに通う小学生との交流を通じて、子どもたちの学ぶ権利の確保と多様性を認め合う社会の実現への糸口を探究した。
4	麴町学園女子高等学校	ニュージーランド留学から学んだこと ※生徒による発表	「世界幸福度報告書」で10位に入っているニュージーランド(NZ)が幸福度の高い国である理由について考察する。それぞれの社会や文化の違いに着目し、特に幸福度調査のいくつかの指標とSDGsの達成度との関連を調べる。多民族国家であるNZにおいて、公用語が重視されるのは必然だが、それにより文化の多様性が失われることについての疑問の下、少数民族や移民の本来の言語が消滅危機言語になることを防ぐためには、どのような意識や政策が必要なのかを考えている。
5	山陽女学園高等部 ※動画発表のみ	地域遺産「宮島」研究－宮島と戦争、厳島神社のおみくじの種類と確率、厳島神社の宝物や奉納品に着目して－	2023年度の高等部2年生の総合的な探究の時間では、世界遺産・地域遺産としての「宮島」を研究対象にした探究を行っている。グループや個人で取り上げるテーマを見つけ、問題や疑問を解決するために現地のフィールドワークや調査を行い、考察した内容をまとめた。そのうち、「宮島と戦争」「厳島神社おみくじの種類と確率」「厳島神

		※生徒による発表	社の宝物や奉納品」を取り上げた3グループの発表をエントリーしたものである。
6	聖徳学園中学高等学校	夏休みの科学館・博物館巡り	中学生の希望者対象に、夏休みの1週間を使い、午前と午後に1館ずつ、理科・社会・鉄道・美術・国語を1日ずつのテーマとして、都内の科学館や博物館を巡った。初年度の目標は、「生徒のいろいろな興味を引き出せたら」という思いで始めたが、全日参加の生徒が数人おり、「多様な興味関心の育成」にも特化できるプログラムだと感じている。その様子を動画でまとめた。
7	宮城県仙台第三高等学校	大堤沼インクルーシブ公園化計画 ※生徒による発表	学校の近くにある大堤沼は多くの土地があるにも関わらず利用が少ないので、有効活用するためにインクルーシブ公園として再生させる、という研究について紹介する。この研究は先輩方の研究を引き継いでいるため、新遊具の設置や、公園の設備の充実、木々の伐採など既に多くの案がある。日本で初めてのインクルーシブ公園は東京都にあり、そこには障がいのある子どもでも遊べる遊具がある。また、現在は山形大学から頂いた学校周辺の模型を基に、案を可視化しようとしている。さらに、より良い案が出るように地域住民へのアンケートを考えている。
8	東京ゆりかご幼稚園	ムササビとの出会いから始まる里山ESD	園庭に棲息する野生のムササビに愛着を持った年長児は、観察や専門家からの指導を通してムササビの生態に興味を深めていった。天敵の存在を知り、ムササビを守るために対策を行う一方で、天敵にも家族がいるかもしれないことに気づき様々な感情を抱いていく。そして幼稚園周囲の森には様々な生き物が棲み、その森を守るためにどうすればよいかを自分事として考え、表現し、行動していく一連の過程をESDの側面から報告する。
9	鳥取県立鳥取西高等学校	持続可能性を探るラオス研修プログラムを事例とする本校のESD実践	本校の取組の軸はSSHやSGH等の研究開発とESD・国際理解教育・授業実践等である。防災教育や課題研究とともにESD研修プログラムに注力し、米国バーモント州や地元での研修を展開している。本発表では水問題・生業・観光の持続可能性を探ったラオス研修プログラムの成果や課題を報告する。国際協力の現場で高校生が見つめたラオスのリアルから感じ取ったことや安全な水を得るための道筋について学んだことを発表する。
10	名古屋経済大学市邨高等学校	未来をつなぐPROJECT	ICTを活用した対話型学習を通じて国内外の学校との交流活動を強化し、専門家や地方公共団体、企業の協力を得て、世界の難民問題・貧困問題とその解決を目指す取組について学び、さまざまな支援活動に参加している。生徒自身が持続可能な開発目標(SDGs)の各項目に横断的に取り組む機会を創出している。※文部科学省EDU-PORTニッポン事業
11	浜松開誠館中学校・高等学校	浜松開誠館のSDGs活動 ※生徒による発表	浜松開誠館のSDGs活動について以下の3点を紹介する。 ・ 気候マーチ、気候サミットの主催(街頭での気候マーチを行い気候変動の重要性を訴える。またオンラインで他校と気候変動対策に

			<p>ついて話し合う。)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ フェアトレード学習と実践 ・ SDGs出張授業(小中学校に高校生が講師としてSDGsについて説明する。)
12	東京都立山崎高等学校	東京都立山崎高等学校の総合的な探究の時間「ESD×山崎町・町田」※生徒による発表	本校の総合的な探究の時間(探求テーマ「ESD×山崎町・町田」)について発表する。1学年は、ユネスコスクール同士の国際交流を含めたグローバルな視点からごみ問題、2学年は地域・山崎町に焦点を当てた活動(町田青年会議所などとの協働的な連携を含む)、3学年は1・2学年での探究活動を踏まえた進路実現に向けた探究活動について発表する。
13	東海大学 ※対面発表のみ	第4回ユネスコスクール関東ブロック大会(2023年7月30日開催)の報告	関東圏の ASPUnivNet加盟大学は、2019年より持ち回りで「ユネスコスクール関東ブロック大会」を開催してきた。第4回目となる2023年度は、東海大学の湘南キャンパスでの開催となった。2018年に発行された『ASPnet コーディネーターのための手引き』では、「ユネスコスクールの3つの柱」が明示されたが、それをメンバー校はどのような形で実践しているのだろうか。各校の発表とディスカッションの内容を報告し、報告書を配布する。

6. 分科会



ユネスコスクール交流会

ーユネスコスクールとしての活動を発展させていくために

登壇者

- ・ 奥平 直子 氏(横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校)
- ・ 城所 拓磨 氏(三重大学教育学部附属中学校)

概要

※参加募集時案内

ユネスコスクール活動の困りごとをみんなで共有し、解決しましょう！はじめにユネスコスクール2校の実践と、活動している中での悩み事を紹介します。その後、グループごとにその解決策を話し合います。この経験を基に、後半は各学校の悩み事を挙げていただき、それに対する解決策を考えたり、お互いの知っている事例を紹介したりして、今後の取り組みについて考えます。明日の授業やこれからの学校づくりに活用できる実践的な内容になると思いますので、是非ご参加ください！本分科会をきっかけに、ユネスコスクール同士のつながり作りやネットワーク強化にも貢献できればと考えています。

実施報告

ユネスコスクール加盟校として実践を着実に進めていきたいものの、なかなか思うようにいかないことは少なくない。本分科会では、そういった「困り感」の共有から、その解決策について協議を行うことをねらいとした。具体的な事例として「学校外の組織とつながりを持つには何が必要か」「ユネスコ活動＝環境活動といった短絡的な取組に陥らないために必要なものは何か」を登壇者から議題として取り上げ、それぞれ的小グループで活発な議論を展開することができた。さらに、それぞれの参加者自身が感じている「困り感」の共有も行い、その解決策についても議論することができた。

どの「困り感」においても重要な共通項として挙げられていたことは、「管理職のリーダーシップ」と「自己の変容が見られる活動内容」である。教員集団が同じベクトルで子どもたちを育てようとするうえで、管理職の確かなリーダーシップは大きく影響を与える。また、自分事として自らが動く「深い学び」となるような活動内容の精選もまた重要であることが確認された。「やらされている学習」ではなく「本気で学ぶ学習」となるようユネスコスクール加盟校である強みを活かし、それぞれの学校が実践を進めていくことに期待したい。

(報告者：城所 拓磨 氏)



「ESD for 2030」をみすえた新たな評価へ — ACCU 評価事業をもとに

登壇者

- ・ 新宮 済 氏(奈良女子高等学校 / 近畿 ESDコンソーシアム)
- ・ 佐野 純 氏(箕面こどもの森学園 校長)
- ・ ACCU評価事業参加メンバーほか

概要

※参加募集時案内

ESDの評価とは？学習指導要領にESDが位置付けられ、すべての学校において「持続可能な社会の創り手」の育成に向けた教育が行われることとなりました。ユネスコスクールにはESDの推進拠点としての役割の継続と、実践の多様性と質の向上を目指す方針が示されています。ユネスコスクール定期レビューの導入も、前向きに捉え活用する学校が多くある一方で、自校のESDで育てたい資質や能力の明確化や、評価について苦戦している教員の意見も耳にします。その中で、ACCUでは全国のESD実践者と有識者を約25名集め、4年間ESDの推進に向けて議論し、各学校で育てたい多様な資質・能力につながる評価手法を開発しました。本分科会では、はじめに開発したルーブリック評価シートを活用した実践報告をします。次に、全国の教員と関係機関の方々の知見を集結して「ESD for 2030」をみすえた新たな評価に向けて、「持続可能な開発のための教育・ロードマップ」を基にしてルーブリック評価を作成します。最後に、有識者の方に評価していただき、活用への助言をいただきます。

実施報告

2019～2022年度まで全国から教員が有志で集まり、ESDのカリキュラムづくりや評価手法開発に取り組んできました。その経緯や教員の実践、事業の成果物*を活用した実践例を共有した。

箕面こどもの森学園の取組では、国際交流プログラムの後に評価項目をピックアップして振り返り、次の活動の改善につなげていく方法を提示した。一方、奈良女子高等学校 新宮済氏からは、「ESD for 2030」で重要視されている「行動化」に着目した「持続可能なライフスタイルの実践」の項目を取り上げた以下の実践が紹介された。

- ・ 地域の大人を巻き込み、河川のプラスチック汚染解決に向けた取組への児童の参画(前任校(公立小学校))
- ・ 外国人観光客を巻き込んだ地域の方々とシカの共生に向けた取組への生徒の参画(奈良女子高等学校)

同実践では、評価で見取りながら授業展開を組みかえることで、児童生徒の行動化が高められていた。

後半は参加者が小グループに分かれ、具体的な取組を評価するルーブリックを作成した。各グループの実践者から日頃の課題などを聞き取り、ディスカッションしながら実践をより良くするために話し合い、まず「気付く」ことから、最終的に「大人を巻き込んだ行動」までの段階を意識したルーブリックが作成された。また、「『行動』の定義を明確にした方が良い」「行動をしないという自由を担保すべき」という意見も出され、多角的に検討してまとめることができた。今後、様々な形でルーブリックが活用されていくように、この分科会が一つの契機になることが望まれる。

(報告者：佐野 純 氏)

* … 変容を捉え、変容につながる評価のモデル(ACCU, 2022)



生徒たちと考える

ー地域や企業とつながる“越境した”ESD活動

登壇者

- ・ 住田 昌治 氏(学校法人湘南学園 学園長 /NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム 理事)
- ・ 浅井 孝司 氏(NPO法人持続可能な開発のための教育推進会議 (ESD-J))
- ・ 山口 由希子 氏(㈱ファーストリテイリング サステナビリティ部ビジネス・社会課題解決連動チーム)
- ・ 川邊 健司 氏(東京家政学院中学校・高等学校)
- ・ 東京家政学院中学校・高等学校生徒
- ・ 兵庫県立川西北陵高等学校生徒
- ・ 米倉 明日子 氏(横浜市立嶮山小学校)
- ・ 横浜市立嶮山小学校児童

概要

※参加募
集時案内

変化が激しく、正解のない時代の中、一人ひとりが自分らしく生きていくためには、どのような力を育んでいけば良いでしょうか。自分たちで対話し、自己決定していくこと。すぐに答えを出すのではなく、多様な考えを尊重し合うこと。そして行動すること。そのためには、学校の外にいる地域や企業とつながり、「越境」していく経験が大切です。本分科会では、2010年より毎年実施している「ESD大賞」受賞校と、企業を中心とした取組として、ファーストリテイリングの“届けよう、服のチカラ”プロジェクト参加校より、児童生徒が発表します。若者たちの声に耳を傾け、異質な外とつながる意義について考えたいと思います。

実施 報告

本分科会では、まず NPO法人日本持続発展教育推進フォーラムが主催する「ESD大賞」受賞校である東京家政学院中学校・高等学校より発表があった。川邊教諭より、同校が目標として設定する「マルチプルインテリジェンス」8つの知能が紹介され、知能の強弱が一人一人の個性になるとし、その個性が発揮される場を多く設定できるようカリキュラムを構築していると話があった。生徒(中3)からは、初めは分からないことだらけのESD活動だったが、ただ自分のやりたいことを進めるのではなく「チームのために行動する」ことや「相手にどう知ってほしいか」を意識する等、自分の変化について発表があった。当たり前がこんなに大変なのだと感じた3年間だったと振り返った。

続いて㈱ファーストリテイリングが2013年より実施している“届けよう、服のチカラ”プロジェクト参加校の児童生徒が登壇した。兵庫県立川西北陵高等学校生徒(高3)より、初めは自分たちが知らない“難民キャンプ”や、努力では変えられない“環境の違い”に向き合う怖さがあったが、活動の中で大きく変化したと発表があった。母校の小学生や地域の公民館の方と深く関わりながら活動したことで、「優しさを繋げていきたい」「人の繋がりは世界を変える原動力になる」と力強く語り、その後のグループワークでも異質な外とつながる課題や意義について話し合った。

(報告者：NPO 法人日本持続発展教育推進フォーラム)



ユネスコスクールを動かす教職員とは？ －活気のある学校づくりの秘訣

登壇者

- ・ 小林 亮 氏(玉川大学 教授)
- ・ 上別府 隆男 氏(福山市立大学 教授)
- ・ 水谷 瑞希 氏(信州大学 助教)
- ・ 丹野 隆史 氏(佐野日本大学中等教育学校)
- ・ 北川 喜樹 氏(勝山市立勝山中部中学校)
- ・ 藤本 弘興 氏(尾道市立重井中学校)

概要

※参加募
集時案内

ユネスコスクールにおける「質の高い教育」(SDGs 4)を担保するには、教職員の「やる気」や意欲をどのように引き出していくかが大きな課題となります。先生方の意欲は児童生徒たちの意欲にもつながっていきます。私たち ASPUnivNet(ユネスコスクール支援大学間ネットワーク)共同研究チームは、この問題に関心を持ち、教職員の動機づけに焦点を当てた学校での聞き取り調査を広島、信州、首都圏の3地域で行っています。本分科会ではとくに顕著な成果を上げている3校のユネスコスクールの先生方にご登壇頂き、ユネスコスクールに加盟したことで先生方の意欲にどのような変化が見られたか、先生方の関与や動機づけを高めるきっかけとなった活動にはどのようなものだったか、等について工夫や課題を紹介していただきます。それを受け、ユネスコスクールの活動を持続的に活性化していくためには何が必要なのかを参加者の皆さまと一緒に検討してみたいと考えています。

実施報告

第4分科会ではユネスコスクールにおける教職員の「やる気」や意欲をどのように引き出し、活気ある学校づくりをしていくかをテーマに共同討議が行われた。

ASPUnivNet共同研究での調査に基づき、まず研究チーム(小林、上別府、水谷)から分科会の趣旨、ユネスコスクールの地域連携の課題、学校でのヒアリングから見えてきた傾向について説明が行われた。これを受け、共同研究の調査協力校の中からユニークな取組を行っている3校(佐野日本大学中等教育学校、勝山市立勝山中部中学校、尾道市立重井中学校)の担当教員にご登壇頂き、ユネスコスクールに加盟した動機、先生方のやる気を引き出すための工夫、成果と課題等について実践報告がなされた。

最後にフロアを交えて、ユネスコスクールの活動の持続的な活性化をめぐるパネルディスカッションが行われた。外的動機づけをいかに内面化していくか、協働型の学びをどう実現していくか、地域や保護者を巻き込んだ形での体験活動をどう推進していくか等の課題について熱い議論が交わされた。教職員の意欲は児童生徒の意欲と連動していることから、児童生徒の発信力を高めていく工夫の必要性も指摘された。動機づけという社会情動的要因に焦点を当てた学校変容について意欲的な議論を創出する分科会となった。

(報告者：小林 亮 氏)



GIGA × ESD

デジタル時代のユネスコスクールを考える

登壇者

- ・ 坂本 旬 氏(法政大学 教授)
- ・ 武藤 久慶 氏(文部科学省)
- ・ 大安 喜一 氏(ACCU教育協力部 部長)
- ・ 米田 謙三 氏(早稲田摂陵高等学校)
- ・ 酒井 美佐緒 氏(福岡市立百道浜小学校)
- ・ 吉岡 達也 氏(聖ヨゼフ学園日星高等学校)

概要

※参加募
集時案内

GIGAスクール構想が始まって4年目となり、ESDにもデジタル端末の活用が期待されています。ユネスコは昨年「グローバル教育モニタリングレポート：教育の中のテクノロジー」を発表し、日本語概要版も公開されました。また、秋には「アジア太平洋のデジタル・シティズンシップ」と題した報告書も公表されています。本分科会では、ユネスコのデジタル教育政策の考え方を紹介するとともに、文部科学省からは GIGAスクール構想の現状が報告される予定です。そして後半では、すでに ESDにデジタル端末を活用している3つの学校から報告をいただき、その後、登壇者を交えて GIGAスクール構想と ESDとの連携のあり方について議論を深めます。

実施 報告

GIGAスクール構想は導入から3年が経ち、日本においてもデジタル教育が本格的に普及しつつある。ユネスコスクール全国大会でも初めてデジタル教育をテーマとした分科会を設置することとなった。そこで、今回はユネスコのデジタル教育の柱であるデジタル・シティズンシップ教育を取り上げ、ユネスコの動向とともにデジタル・シティズンシップを含め積極的にデジタル端末をESDに活用している学校の実践が報告された。

ユネスコは2023年に「グローバル教育モニタリングレポート：教育におけるテクノロジー」と「アジア太平洋のデジタル・シティズンシップ」を公開しており、デジタル教育への基本的な考え方を共有した。そして文部科学省からは GIGAスクール構想の現状とユネスコの理念との関係について報告がされた。GIGAスクール構想が教育の包摂性と結びついていることが強調された。また、学校からは先進的なESDにおける ICTの活用事例やデジタル・シティズンシップ教育に取り組んでいる事例が紹介された。

その後、登壇者によるパネルディスカッションが行われ、報告に関する質疑応答やデジタル時代のESDの可能性について議論が行われた。参加者からもユネスコのデジタル教育への考え方や GIGA端末を活用したESDについて、さまざまな意見や質問が出された。最後に、今後 GIGA×ESDの実践を進めていくために、実践交流を続けていくことが確認された。

(報告者：坂本 旬 氏)



Bringing living heritage to the classrooms in Japan

登壇者

- Duong Bich Hanh, Program Specialist for Culture, UNESCO Regional Office for East Asia
- Teachers from schools abroad (Video clips)

概要

※参加者
集時案内

Integrating living heritage in school teaching and learning can enhance education quality, enliven the experiences of students and teachers, and contribute to keeping this heritage alive for current and future generations. UNESCO encourages countries to safeguard living heritage through formal and non-formal education. A methodology has been developed on why and how to integrate living heritage in lessons and extracurricular activities in schools.

The session will provide the participants with detailed information on the methodology developed for successful integration of living heritage in schools. It will also showcase successful examples from countries in Asia-Pacific and beyond.

学校の授業や学習に“生きた遺産(無形文化遺産等)”を取り入れることは、教育の質を高めたり、生徒や教師の経験を活性化させたりするなど、未来に向けて貢献することができます。ユネスコは各国に対し、教育を通じて“生きた遺産”を保護するよう奨励しており、学校の授業や課外活動に“生きた遺産”をどのように取り入れるのか、その方法論が開発されています。本分科会では、学校における“生きた遺産”の学習のために開発された方法論について詳しくご紹介します。また、アジア太平洋諸国をはじめとする世界各国の実践例についてもご紹介します。

実施報告

学校教員、大学教授、学生の参加を得て、ウェビナー「Bringing living heritage to the classroom」を開催した。このウェビナーは、“生きた遺産”と教育を融合させることの利点についての認識を高め、教員、地域住民、生徒、保護者、その他すべての教育・文化関係者が手を携えてこのアプローチを推進するための効果的かつ革新的な方法について、段階的な方法論を提供することを目的としたものであった。

文化と教育の融合は、日本では決して馴染みのないテーマではない。参加者は、教育や学習において“生きた遺産”をどのように活用してきたか、それぞれの経験を語った。ユネスコが開発した方法論が、このような既存の取組をより包括的、体系的、持続可能なものにすることに貢献することが期待される。これには、地域社会との緊密な連携、教科を超えた教師間の協力、調査や研究結果の発表を通じて生徒が主体的に学習に取り組むこと、ジェンダーや人権といった持続可能な開発に関する様々なトピックを探求するツールとして“生きた遺産”を活用することなどが含まれる。

「“生きた遺産”を教室に」という方法論は、教育の質を向上させ、“生きた遺産”を保護するという2つの目的を掲げ、アジア太平洋とヨーロッパで行われている複数年にわたるパイロット・プロジェクトの成果に基づいて開発された。現在、関心のある教員や関係者のために、[アニメーションシリーズ](#)、[リソースキット](#)、[自主学習コース](#)など、幅広いリソースが提供されている。

(事務局仮訳)

(報告者：Duong Bich Hanh 氏)



※ 詳しくはユネスコ北京事務所の[公式ウェブサイト](#)(英語)をご覧ください。

7. クロージング

クロージング映像

法政大学・坂本旬教授のゼミに所属する大学生3名に作成いただいたクロージング映像を上映した。当日の様々な場面の画像や動画が順を追ってまとめられ、参加者各々が1日を振り返る機会となった。

分科会報告・総括

オンラインのみで実施された第6分科会を除く5つの分科会の代表者より、分科会の様子や成果について報告があった。その後、本大会のまとめとして、ユネスコ・ジャカルタ事務所長 林川氏より以下のとおり総括コメントをいただいた。

林川氏コメント

長年ユネスコ職員として勤務してきたが、日本のユネスコスクールの大会に初めて参加した。これまで各国で取り組まれているユネスコスクールの活動には様々な形で関わってきたが、今回日本にこれほど豊かな実践があり、先生、生徒、企業や地域が協力して活動されているということを知り、参加して本当によかった。今後は日本のユネスコスクールにもっと注目していきたい。国内では今回のように情報共有の場もあるが、今後はもっと国外に活動を発信し、広げていくことが重要である。

日本のユネスコスクールは人と人、また世代間のつながりを大事にして、学校全体からさらにはコミュニティ全体を取り込んで、学校現場を中心に ESDに取り組み、SDGsを考えていることを実感した。現在の日本では、学校はコミュニティの中心ではなく、その一部としての位置付けかもしれない。発展途上国では、今でも学校がコミュニティ唯一の組織で、教育のみならず生活、セキュリティなどあらゆる面での中心を担っている。ユネスコはそのような国に対しての支援もしており、そういうところでも日本の経験を共有していきたい。

最後に、ESDはその活動を通じて理念や価値観、行動様式が生活の一部として根付いていくことが最終的な目標だと考える。その基盤をつくるのがやはり学校であり、教職員や生徒の皆様の貢献によるところが大きい。個人的にも、皆様の力を原動力にして世界に広げていきたいと思った1日となった。



閉会挨拶（公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター 教育協力部長 大安 喜一）

多くの方々のご協力により無事に本大会を開催することができた。

日本のユネスコスクールは質・量ともに世界の中でも先進的に活動をおこなっており、ESD推進拠点としてのこれまでの豊富なリソースと経験を活かして、地域のネットワーク推進から国際的なネットワークへとつながっていくことを期待している。ユネスコスクール事務局としても、各校の取組の発展と国内外のネットワークづくりに寄与していきたい。

また、今回の大会はユネスコ・ジャカルタ事務所や北京事務所の協力も得て開催した。ユネスコの政策や事業計画・実施に対する日本からのインプットを、今後も皆様とともに発信していきたい。

「ユネスコウィーク2024」の一環として実施した本大会を契機として、ユネスコスクールが様々な学校や組織とつながる機会となることを願っている。改めてご登壇者及び会場・オンラインでご参加の皆様にご挨拶を述べ、これをもって大会を終了する。



データ

実績

	会場	オンライン	合計
大会参加登録者数	203	202	405
当日参加者数	182	127	309
アーカイブ配信視聴登録者数*1	—	—	55

*1 … 2024年3月31日時点

各分科会参加登録者数					
第1分科会 (対面のみ)	第2分科会 (対面のみ)	第3分科会 (ハイブリッド)	第4分科会 (ハイブリッド)	第5分科会 (ハイブリッド)	第6分科会 (オンラインのみ)
38	39	88	109	64	21

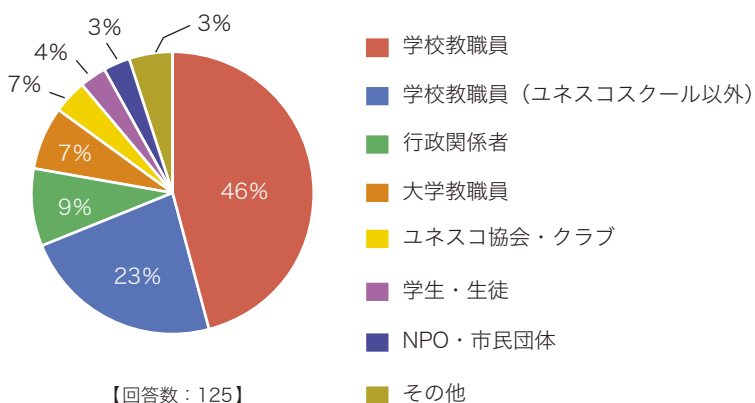
※ 当日参加者数は集計記録なし。

事後アンケート

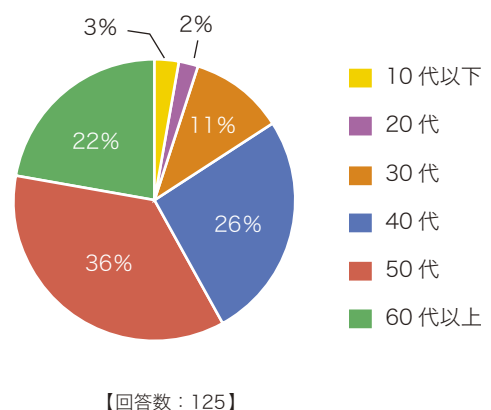
第15回ユネスコスクール全国大会の参加者へ、大会後 WEBアンケート調査を行った。調査期間は2024年1月20日(土)～2024年2月22日(木)、最終的な回答数は**125件**となった。

参加者基本情報

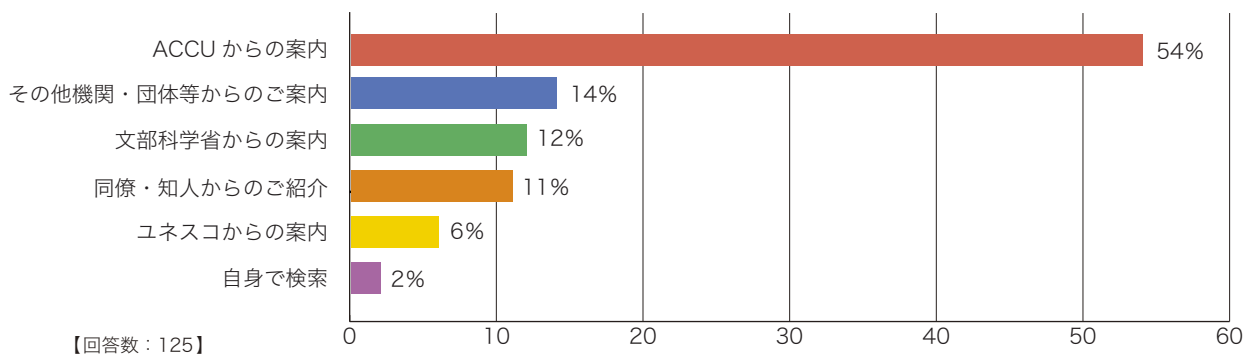
1. あなたのお立場を教えてください。



2. あなたの年代を教えてください。

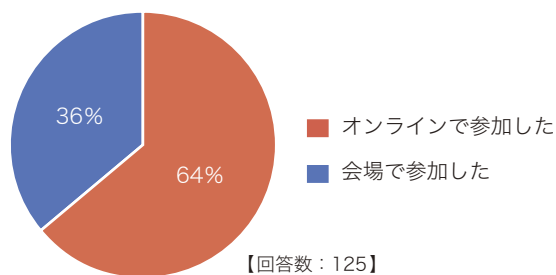


3. 本イベントをどのようにお知りになりましたか？

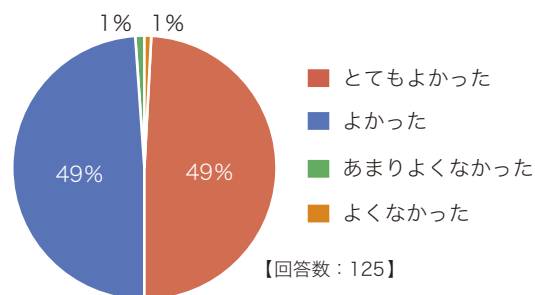


第15回ユネスコスクール全国大会について

1. 第15回ユネスコスクール全国大会に参加されましたか。



2. 第15回ユネスコスクール全国大会に対する評価をお聞かせください。



3. 評価の理由を教えてください。

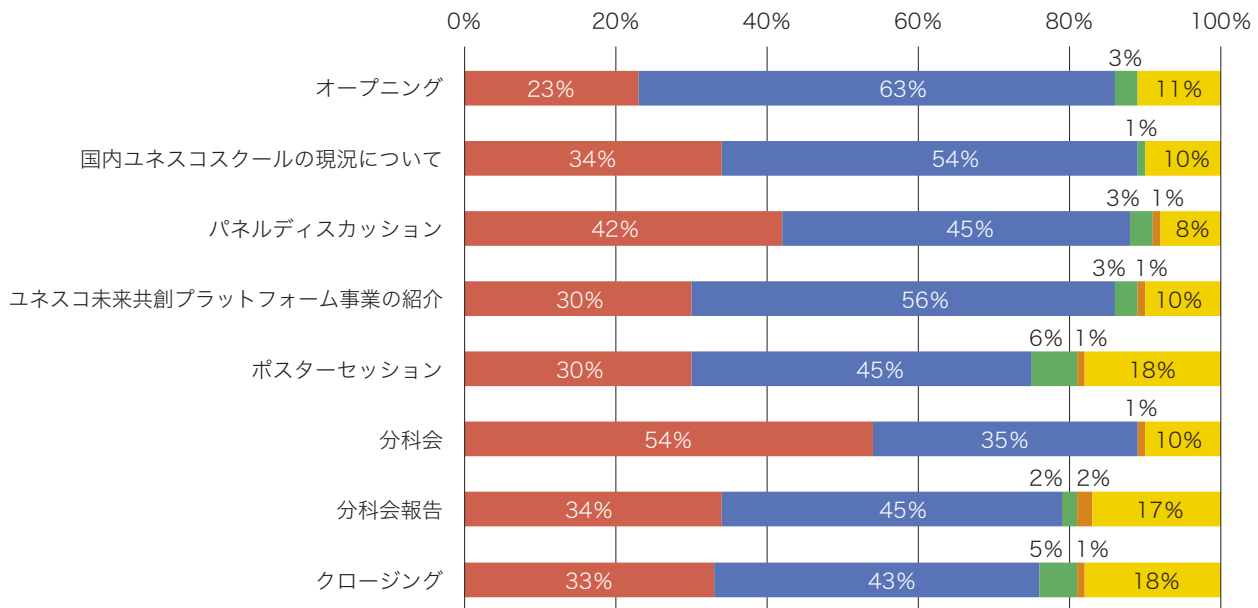
主な回答
成果や課題を含め、他校の実践を見聞きすることで、今後の自校への取組を考えることができた。
SDGs や ESDについて理解を深めることができた。
ネットワークの重要性を再認識できた。
ハイブリッド形式でうまく運営されていた。オンラインでも参加できて良かった。
ユネスコスクールの現状と課題、および今後の目標を多面的に知ることができた。
ユネスコスクールの認定を受けていることのメリットを再認識することができた。
ホールスクールでの取組に感銘を受けた。
他地域、他校の先生方、ユネスコ協会の方々といった人と直接の対話ができ、つながりや学びを得る機会があった。
パネルディスカッションでは、小学校、中学校、高校とそれぞれの段階の活動を知ることができた。学年が上がるごとに実践内容を積み上げてステップアップさせていくことも分かった。

以前参加した全国大会より規模が小さく、ポスターセッションの数も少なく感じた。
各学校がどのような手段で提携校を見つけられるか、わかりやすい情報があると良いと思った。
当日の発表資料を共有してほしい。
午前の部が長いように感じた。具体的な取組だけでなく、ESD的な学びに取り組むマインドのような視点が入られるともっと深みが出るのではないか。
より主体的・対話的で深い学びの視点で運営してほしい。また、授業改善のロールモデルになるものを参加者に体験できるようにすることも大事である。
全体会場での座席間隔が狭く長時間は厳しかった。ポスターセッションは各ポスター間隔が狭く、ゆっくり聞いたり対話したりすることが難しかった。
それぞれの学校の取組はできる限り生徒の口から発表いただきたいかった。

4. プログラムごとの評価を教えてください。

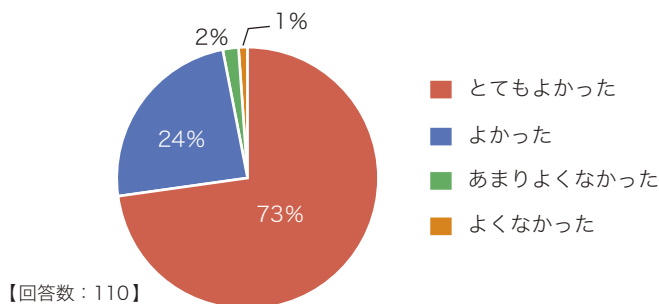
【回答数（上から順に）：118、116、119、119、119、122、121、120】

- とてもよかった
- あまりよくなかった
- よかった
- よくなかった
- その他・参加していない



※端数処理の関係で、内訳の和が100%にならない項目があります。

5. 参加した分科会に対する評価についてお聞かせください。

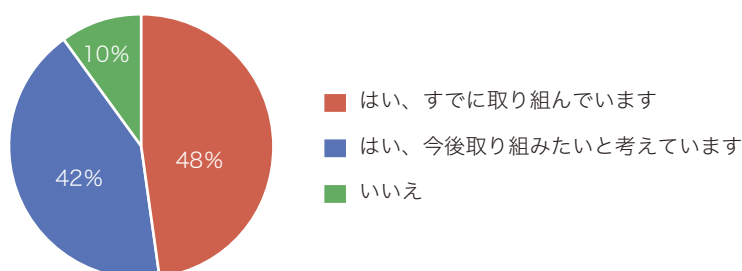


6. 評価の理由を教えてください。

主な回答
ESDの考え方や他校の実践を知ること、今後の自校への取組を考えることができた。
企業や団体と協働して活動することの大切さを実感した。企業の取組についてさらに詳しく知りたかった。
教育のデジタル化の最新の方向性がよくわかり、ESDとの関係など ICTについて多面的に考えることができた。
ワークショップ形式での運営だったため、参加者同士で学校の課題や改善策をじっくりと共有できた。
ひとつの方法論について深める機会にはなったが、多様な方法論についても知りたかった。
ユネスコスクールであることを学校づくりに生かしている事例が多いことを再確認できた。管理職として、ユネスコスクールの運営の仕方を確認できた。
一つの評価手法を活用するのであれば、指導の方向性ではなく、支援の一視点程度に留めた方が良いかもしれない。
発表者に質問ができ、双方向のコミュニケーションを取ることができた。
活動が国際的発信力の点で課題が多く、この点で企業や NPOなどの連携支援が必要だと感じた。ACCUからの支援も明確にしてほしい。
現場の若い先生の話聞くことができ、若いパワーを感じ取れた。
活気ある学校づくりのためには職員がワイワイガヤガヤと協議することが不可欠と分かった。
高校生のハツラツとした発表が良かった。生徒たちの発表がどの学校も素晴らしかった。
最新の取組報告、概論など詳しく知れて良かった。細かい手法も提示されていた。
時間が足りなかった。参加校同士の話し合いの時間をもう少し多く確保できたら良かった。
スピーカーが多様で参考になった。発表構成とモデレーターの取りまとめが良かった。
自己紹介やディスカッションの時間があり、温かい雰囲気の中で進められた。子どもたちの発表もとても良かった。

※どの分科会に対するコメントかは明示していません。

7. 企業との連携に関心がありますか。



【回答数：122】

8. その他、第15回ユネスコスクール全国大会に関するコメント・ご感想・ご要望等がございましたらご記入ください。

主な回答
大会案内が遅く詳細が直前まで分からなかったため、日程調整が大変だった。
オンラインでの参加は集中力が持続しないため、対面のみにして録画したものを希望者に配布するのはどうか。
ユネスコスクール地方大会とのすみ分けが気になった。
ユネスコスクールについて何も知らない教員が、初歩的なことを一から学べる基礎講座のようなものがあると良い。
どのような姿勢でカリキュラムや授業・学習プログラムを検討すれば良いのかを学ぶことができれば、それぞれの地域や学校の特性に沿った学びを作っていくことができるのではないかと。
国際連携・協力の視点が弱く、ESDのガラパゴス化が進行している点が危惧される。
資料は事前にアップするか、紙で提供いただけるとありがたい。スクリーン上では見えにくい場面があった。
終了後の懇親会のようなものがあれば、新しいヒューマンネットワーク構築ができたかもしれない。
一般の公立小中学校での取組を紹介し合えるような場面を多く作ってほしい。
対面参加者にとって開催は気候が良い時期にさせていただきたい。
地方からは対面参加が難しいため、ハイブリッド開催は続けてほしい。併せて、オンライン参加可能な分科会が増えればより良い。
アーカイブ配信などで後日見ることができると良い。
学校関係者以外等、より幅広く意見や参考となる情報を共有することができればさらに活動に広がりを持たせることができるのではと思う。

フォトギャラリー





公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCUCO)内

ユネスコスクール事務局

東京都千代田区神田神保町 1-32-7F 出版クラブビル

TEL: 03-5577-2852 FAX: 03-5577-2854

URL: <https://www.accu.or.jp/>

※本報告書は、令和 5(2023)年度 ユネスコ未来共創プラットフォーム事業の一環として文部科学省の委託を受けて作成しています。